第8課　イエスは同情を示された

【暗唱聖句】

「イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て深く憐れみ、その中の病人をいやされた」マタイ14:14

【今週のテーマ】

イエスはいつも人々を深く憐れみ、同情を示されました。同情とは、同じ情を伴うということですが、それは無言のうちにも誰かと一緒にいること、しかも深い意味で一緒にいることを意味しています。人々に同情を示すことによって、人々と交わるという問題をまったく新しい段階へと引き上げます。

【日曜日　うめき声を聞く】

広大な宇宙は神秘に満ちています。高性能な天体望遠鏡が発明されると宇宙のことが解明されると思いきや、なお一層なぞが深まるほど、圧倒的な世界が広がっています。そのような広大で神秘な宇宙の中に私たちが生きていることを思うとき、これは偶然なのか、それとも意味があるのかと悩み、絶望感にうめき苦しんでいる人もいます。聖書の神は、そのようなうめき声に耳を傾け、憐みをかけてくださる方です。

「主は士師たちを立てて、彼らを略奪者の手から救い出された。2:17 しかし、彼らは士師たちにも耳を傾けず、他の神々を恋い慕って姦淫し、これにひれ伏した。彼らは、先祖が主の戒めに聞き従って歩んでいた道を早々に離れ、同じように歩もうとはしなかった。2:18 主は彼らのために士師たちを立て、士師と共にいて、その士師の存命中敵の手から救ってくださったが、それは圧迫し迫害する者を前にしてうめく彼らを、主が哀れに思われたからである」士師記2:16～18

士師記の中に、何度も主から救われているにも関わらず、主の御声に耳を傾けず、他の神々もとへと道を離れていく民たちに対して、なおも哀れに思い、繰り返し救いの御手を差し伸べられる神様が描かれています。旧約聖書の神様は冷酷だと感じている方があるかもしれませんが、決してそうではなく、愛と憐みに満ちていることがわかります。

「それから長い年月がたち、エジプト王は死んだ。その間イスラエルの人々は労働のゆえにうめき、叫んだ。労働のゆえに助けを求める彼らの叫び声は神に届いた。2:24 神はその嘆きを聞き、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされた。2:25 神はイスラエルの人々を顧み、御心に留められた」出エジプト記2:23～25

わたしたちの叫びを主は必ず聞いてくださいます。たとえ助けが遅れているように感じることがあっても、わたしたちの叫びが届いていないのではありません。ここに主に対する私たちの信仰が必要になってきます。主を信じ、主に叫び、主の救いの時を待つ、これが信仰者の歩みです。

【月曜日　同情的な私たちの救い主】

「イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て深く憐れみ、その中の病人をいやされた」マタイ14:14

「また、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた」マタイ9:36

「主はこの母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われた」ルカ7:13

聖書の中には、イエスが人々を憐れまれたという言葉がたくさん出てきます。いかに憐み深い方だったかがわかります。この憐みという言葉の中には、同情や共感、他者に対する思いやりや深い悲しみが含まれています。そして、その憐みの心が、その人を助けたいという衝動となって、イエスを突き動かしました。わたしたちも同様に、憐みの心を持ち、言葉だけではなく、憐みの心が行動となって現れることが大切です。そのとき教会はどのような教会となっていることでしょうか。

【火曜日　彼らの立場を理解する】

「あなたがたは神に選ばれ、聖なる者とされ、愛されているのですから、憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい」コロサイ3:12

「終わりに、皆心を一つに、同情し合い、兄弟を愛し、憐れみ深く、謙虚になりなさい」第一ペテロ3:8

「世の富を持ちながら、兄弟が必要な物に事欠くのを見て同情しない者があれば、どうして神の愛がそのような者の内にとどまるでしょう」第一ヨハネ3:17

聖書はわたしたちに繰り返し、憐み深くありなさいと教えています。憐みという言葉には「一緒に苦しむ」という意味があります。良きサマリや人へのたとえ話の中でも、「ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い」（ルカ10:33）と書かれてあります。サマリア人はユダヤ人の苦しみを自分のことのように考えて、救いの手を出さずにはおれませんでした。ところが、先に通ったレビ人や祭司はまず自分の身の安全や汚れてはならない（死体に触れると汚れるという教え）ということを考えました。ここに大きな違いがあります。

放蕩息子のたとえの中でも、父親は自分勝手な息子が戻ってきたとき、それを喜び、憐みを現しました。放蕩息子を自分自身のことと考えたとき、神から拒絶されてもおかしくないわたしが、暖かく迎え入れられるのは、神が憐み深い方だからです。だから、わたしたちも他者に対してどこまでも憐み深くなければならないのです。

【水曜日　イエスは涙を流された】

「イエスは、彼女が泣き、また、彼女と一緒にきたユダヤ人たちも泣いているのをごらんになり、激しく感動し、また心を騒がせ、そして言われた、11:34 「彼をどこに置いたのか」。彼らはイエスに言った、「主よ、きて、ごらん下さい」。11:35 イエスは涙を流された」口語訳ヨハネ11:33～35

「イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのを見て、心に憤りを覚え、興奮して、11:34 言われた。「どこに葬ったのか。」彼らは、「主よ、来て、御覧ください」と言った。11:35 イエスは涙を流された」新共同訳ヨハネ11:33～35

イエスはラザロの死を嘆き悲しむ人々を見て、心が激しく感動（憤り）し、心を騒がして（興奮して）涙を流されたと書かれてあります。このイエスが流された涙にはどんな意味はあるのでしょうか。一つは、「悲しむものとともに悲しんでくださる」主の同情の涙があることでしょう。人々の悲しみを自分の悲しみとして感じ、受け止めてくださった涙ということです。しかし、イエスはこの後、ラザロを蘇えらせるおつもりだったことを考えると、単に同情の涙だけではないようです。それを推測させるのがイエスが憤りを覚えと書かれてあることです。イエスはなぜ人々が嘆き悲しんでいるのを見て憤られたのでしょうか。蘇りを信じることができない不信仰に対してでしょうか。そのように解説されることもあります。しかし、エレン・G・ホワイトの言葉の中で興味深いのは、全人類が罪の結果受けなければならなくなった苦難と悲しみ、涙と死に対する憤りだったと言っています。つまり、人間が創造されたとき、本当はこのような悲しみの涙はなかったのです。このような悲しみを味わわせるために、神様が人間を創造されたわけではなかったのです。しかし、いま目の前で愛するラザロの死に対して嘆き悲しむ人々の姿を見たとき、主は何とかしてこの人類をすべての苦しみから救いたいという激しい情動がわきあがり、涙を流されたのです。

【木曜日　もう一人の慰め主】

「神は、あらゆる苦難に際してわたしたちを慰めてくださるので、わたしたちも神からいただくこの慰めによって、あらゆる苦難の中にある人々を慰めることができます」第二コリント1:4

わたしたちは信仰の旅路の中で、何度も主から慰めを受けてきたことでしょう。その慰めによってどれだけ救われたことかわかりません。聖書はそのわたしたちが受けた主の慰めによって、今度は苦難や悲しみの中にある人々を私たちも慰めることができると言います。多くの慰めを主から受けた人は、それだけ多くの慰めを他者に対しても与えることができるのです。

他者をどのようにして慰めることができるでしょうか。深い悲しみの中にある人を慰める言葉がないと感じることがしばしばありますが、言葉以上に大切なのは、そこに一緒にいてあげることです。口を開くよりも、聞いてあげることです。また一人で慰めるのではなく、複数の人たちが、それぞれの接し方で慰めることが力となることもあります。そして、主の慰めを与えることができるように、主に祈ることが大切です。